

戦間期ポンド-ドル二極通貨体制の教訓

神戸大学大学院

龍谷大学

前田 直哉

要 旨

本報告の目的は、基軸通貨国の国際流動性供給と国際収支調整の視点から戦間期ポンド-ドル二極通貨体制の歴史的特徴をつかみ、それを踏まえた上で将来成立するであろうドル-ユーロ二極通貨体制に対し何らかの教訓を引き出すことにある。

通常、二極通貨体制は「本質的に」不安定であると言われているが、必ずしもそうではない。一極通貨体制に比して、確かに二極間の過剰な資本移動は為替相場を大きく変動させる可能性を持つが(国際通貨システムの攪乱要因)、二極通貨体制は基軸通貨国に国際収支節度を強制させるメカニズムも備えている(国際通貨システムの安定化要因)。戦間期の国際通貨システムが不安定だったのは、ポンド-ドル二極通貨体制であったことによる必然的な帰結ではない。それではポンド-ドル二極通貨体制が不安定的になった真因とは何だったのか。

1930年代の国際通貨システムが未曾有の混乱を来した主因には、イギリス、アメリカのブロック化が挙げられる。それに伴う二極の一方的な措置や行動(近隣窮乏化政策)によって、二極通貨体制の調整メカニズムが機能不全に陥ってしまった。しかも、イギリスは国際流動性供給をブロック政策の一環としてブロック加盟国に限定し、アメリカは1930年代初めに受けた内外からの経済ショックが大きかったばかり、国際流動性を激減させた。

果たして、両国の大幅かつ慢性的な国際収支不均衡による通貨危機、国際流動性不足、そして為替相場の乱高下という国際通貨システムの攪乱要因だけが後に残った。遂に戦間期には、二極通貨体制の調整メカニズムが円滑に機能し、国際通貨システムが安定的になるということとはなかったのである。

戦間期の二極通貨体制の歴史的特徴を踏まえて、将来成立するであろうドル-ユーロ二極通貨体制下に対し教訓を引き出すとすれば、二極を中心とした主要国間の政策協調に加えて、明示的な「ゲームのルール」を新たに構築することである。「ゲームのルール」の再構築によって、二極が一方的な措置や行動を取ることを防止し、二極通貨体制の秩序立った運営を目指すべきなのである。

(注)本報告のフルペーパーは、『龍谷大学経済学論集』第43巻第2号に掲載予定である。